

令和元年度第2回ちば文化芸術振興懇談会

1 日 時 令和元年12月2日(月) 午前10時～午前11時50分

2 場 所 千葉県教育会館本館 604会議室

3 出席委員

加藤 修委員(座長)、鈴木 通大委員(副座長)、大熊 雅美委員、椎名 喜予委員、椎名 誠委員、
鈴木 勲委員、永井 俊秀委員、渡部 徹委員

以上8名

4 議事の概要

(1) 東京2020大会に向けた文化プログラムの令和元年度実施報告について

「資料1」により事務局から説明。その後、各委員から意見。

【事務局】(説明)

オリンピック・パラリンピックはスポーツだけでなく文化の祭典でもあり、東京2020大会でもオールジャパンで推進することとしています。そこで、県でも大会の機運醸成や、大会で多くの人が集まる機会に本県の魅力発信などにつなげるため、各種文化プログラムを実施しており、そのうち今年度行った主な文化プログラムについて御報告いたします。

1つ目は千葉・県民音楽祭、世代や障害の有無に関わらず参加できるプロアマ合同コンサートとして、8月25日に開催しました。後ほど詳しく御説明します。

2つ目は次世代に残したいちば文化資産PRです。昨年多くの県民の方に千葉県の文化資産を再認識していただき、次世代に継承していく契機とするため、県民投票等に基づきちばの文化的魅力を持つモノやコトを幅広く111件選定しました。今年度はそのPRを行っており、プロモーションビデオやちば文化資産を周遊するルートの作成、スタンプラリーなどを実施しております。

3つ目はちばアート祭です。ちば文化資産を作品やテーマとして活用し、あらゆる方々が参加・体験できるアートイベントを8月14日から25日に実施しました。こちらも後ほど詳しく説明いたします。

4つ目は県民の日行事です。6月15日の県民の日を契機に、県民の方にちばの魅力を再発見し、ちばをもっと好きになっていただけるよう、様々なイベントを各地で行うものです。幕張メッセで行う中央行事は6月16日に開催し、その他県内各地域でイベントを行う地域行事や、入園料・入場料の割引などを行う企業などの賛同行事は、5月～9月に実施しました。

5 つ目は千葉・県民芸術祭です。こちらは県内の芸術文化団体と協働して、日ごろの活動の成果を発表する場を提供したり、県民の方には質の高い展示や舞台芸術を鑑賞する機会を提供するため行う行事となります。県域芸術文化団体による行事として、県民が主体となって県内各地で行う発表会や展示会などが6月から2月にかけて行われる他、中央行事として、県内の芸術団体による公演や、展示・体験による活動紹介を行うイベントを千葉県文化会館で9月29日に実施しました。

今御説明した県が行う文化プログラムのうち、東京2020大会に向けたシンボリックな文化プログラムについて詳しく御説明いたします。

先ほど御説明した5つの事業のうち、千葉・県民音楽祭と、ちばアート祭が該当しますが、こちらは両方とも、東京2020大会を契機に始めた事業となります。また、文化プログラムの実施により、文化の側面から大会の機運醸成や、県内外から人が多く集まる大会を、PRの絶好の機会と捉え、本県の文化振興や魅力発信等を図っております。

まず、千葉・県民音楽祭の概要や今年度の結果について御説明いたします。

この音楽祭は、平成29年度から毎年度実施しているものですが、世代や障害の有無に関わらず、多くの方が共に参加できる「音楽」をテーマに、プロのオーケストラと一般のアマチュア参加者が共演する県民参加型コンサートとなります。

平成29年度にプロアマ合同コンサートを初めて開催した後、平成30年度は29年度の内容に加え障害者が主体となって表現する音楽ステージを追加し、令和元年度はさらに合唱団体の公募、来年度はさらにダンス団体の公募を加えるなど、大会が開催される2020年に向け、年々内容を充実させております。

今年度の実績としましては、一般参加者の募集・選定で、楽器演奏者、障害者ステージ、合唱ステージの公募と選定を行いました。3月から4月にそれぞれ募集したところ、県内各地から応募がありました。また5月から6月に本事業を委託している千葉県文化振興財団と、プロオーケストラ千葉交響楽団の楽団員が審査し、出演者を決定いたしました。

選定した出演者は、本番の8月までに千葉交響楽団との練習会を行い、スキルアップを図りました。また、本番の前日となる8月24日にリハーサルを行った後、8月25日にコンサート本番を千葉県文化会館で実施いたしました。来場者1,421人、出演者は、指揮者として千葉交響楽団の音楽監督である山下一史氏、千葉交響楽団の他、視覚障害をお持ちのヴァイオリニスト川島成道氏をゲストとしてお迎えしました。また、公募で選んだ楽器演奏者や障害者団体、合唱団体の他、ダンススクールの子供たちにも出演していただきました。

ステージプログラムは、主に公募で選んだ参加者たちと千葉交響楽団による共演ステージ、視覚障害

をお持ちのヴァイオリニスト川島氏と千葉交響楽団によるステージを行い、演奏の合間に、オリンピック・パラリンピック PR コーナーということでテコンドーの紹介や実演、また日本の伝統楽器の紹介ということで小鼓の紹介・実演を行いました。

今回は、パラリンピック開催1年前のコンサートということで、オリパラに関する曲目の演奏のほか、フィナーレの前に「ちばが奏でるハーモニー」として、障害者団体と合唱団やダンス団体、千葉響がNHKの2020応援ソングである「パプリカ」を一緒に演奏し、障害のあるなしに関わらず一緒に音楽を楽しむステージを設けました。

コンサート当日はロビーイベントも開催し、楽器体験やオリパラの競技紹介、ちばの文化の紹介なども行い、イベント全体を通して、音楽に触れ、楽しむとともに、ちばの文化や大会の盛り上がりを感じられる内容といたしました。

続きまして、ちばアート祭の概要の御説明と今年度実績の御報告をいたします。

ちばアート祭は、ちば文化資産を会場や作品のテーマとして活用し、あらゆる方々が参加・体験できるアートのイベントとして、今年度から実施している事業となります。

今年度は、ちば文化資産をテーマとした絵画・写真作品を公募し、千葉県立美術館に展示した他、その中から優れた作品の表彰を行いました。また、県内大学と連携し、デジタルアート作品の展示やワークショップを実施した他、千葉ポートパークにて屋外展示やライブパフォーマンスを行いました。今年度の実施期間は8月14日から25日で、来場者数は累計で14,717人となりました。

来年度は、今年度実施した絵画写真公募展やワークショップなどの他、大型の屋外デジタルアート作品の展示を行います。また、開催期間は8月1日から9月6日までと、約1か月に拡大し、会場も千葉市に加えて香取市でも同時開催するなど、今年より内容を充実させ実施する予定です。

アート祭では様々なプログラムを行いましたが、まずは開会式ということで、アート祭期間中の最初の土曜日に、千葉県立美術館の第7展示室にて、「ちばアート祭賞」の授賞式として、絵画・写真公募展に御応募いただいた方の中から優れた作品の方に賞を授与いたしまして、またライブペインティングをNARAMIX氏という千葉県在住のアーティストの方に行っていただきました。

次に絵画・写真公募展ですが、同じく美術館の第7展示室にてアート祭期間中、県民の皆様から御応募いただいた作品を展示いたしました。応募総数は576点となり、たくさんの方々にちば文化資産をテーマに作品を作って、御応募いただきました。

次に、県内の大学等と連携したデジタルアート作品展ということで、同じく美術館の第7展示室にて、こちらは県内の大学である城西国際大学の作品と、プロの方、岡ともみ氏の作品、合計3点の体験型デジタルアート作品をアート祭期間中展示いたしました。

次に、県内の大学等と連携したワークショップですが、こちらは千葉大学と連携したワークショップを実施しました。8月17日と8月24日に実施した木組みのオブジェづくりとランプシェードづくりですが、こちらは千葉ポートパークの円形広場にて、自然の木を材料に、多くの人々がリレーするように参加して大きな木組みのオブジェを作成するものでして、またランプシェードの絵付けも併せて行い、夜間に点灯を行いました。

また「住みたい国を思い描き、旗をつくる」というワークショップを8月18日と25日に実施し、参加者の方には住みたい国を考えながら、オリジナルの国旗を制作していただきました。

次にアーティストと連携したワークショップとして、小原典子氏による千葉県内に生息する架空の動物を空想して、特殊な樹脂でその動物を作るというワークショップを期間中の土日に開催しました。制作は美術館のアトリエ、展示は千葉ポートパークにて行いました。

千葉ポートパークの円形広場にて、土日に「夕暮れライブ」として、NARAMIX氏によるライブペインティングと、車椅子ダンサーかんばらけんた氏率いるO.F.Fによるダンスパフォーマンスを、それぞれ夕方5時から5時30分に実施しました。

また、デジタルナイトサファリと題しまして、アート祭期間中、千葉ポートパークの円形広場において、千葉県の動物やちば文化資産をモチーフにした作品など、千葉をテーマにした作品の屋外展示を行いました。夜間、夜6時から8時50分には作品のライトアップも行い、来場された方々には様々な種類のアートに触れていただきました。

今年度実施した主な文化プログラムの実施報告は以上となります。

【委員】

「次世代に残したいと思う『ちば文化資産』」の方で、スタンプラリーというのを実施したと記載があるが、この成果についてどのように位置づけているのか。多かったとか、ちょっと考えていたより参加者が少ないとか、そういう意見や結果をお聞きしたい。

【事務局】

本年度実施したスタンプラリーは、今詳細な数値は手元に資料がないが、二百数十件の応募をいただいた。今回設定したスタンプラリーが県内の6地域それぞれを回っていただくような、かなり広範囲にわたるスタンプラリーだったが、参加いただいた方々にアンケートを取らせていただいたところ、「行ったことがなかったところに訪れることができた」「千葉にこんな魅力があるんだということがわかった」など、そういった前向きなアンケートの感想がかなりたくさん寄せられたと思う。やはり単純にちば文

化資産がありますよ、という広報をするだけではなくて、実際に足を運んでいただくということが大事
と言うか、効果があると感じている。

【座長】

今の説明に加え(3)ちばアート祭について話させていただくと、スタンプラリーとして実際に見学し
た後、それを写真・絵画などの制作につなげることで、さらに深い関わりを構築すること目指した内容
となっている。今回第1回展ということでしたが、今後も続けることによって「市民参加」という観点
からの浸透が充実していくかと思われる。さまざまな関連を期待する。

【委員】

(1)千葉・県民音楽祭について、聴衆の一人として聞いたので、感想というか、印象に残った点をお
話させていただきたいと思う。

資料にもあるように、お客さんは大変たくさん来ており、満席だった。資料にもあるように、3回目だ
が、回を追うごとにお客さんが増えてきているということで、また来年が楽しみだと思う。本当にお
客さんがたくさん来てくれるということは、これはやはり一つの成果であると考えている。企画する方
は、あるいはそこまで準備は大変だったと思うが、回を追うごとに来場者が増えてきたということ
で一つの成果が上がっているのではないかなと思う。

印象としては、まず満席だな、ということを感じた。それからオリンピックのこと。オリパラの関係
のPR、実際にステージで競技を見せていただくというようなこと、あるいはロビーで紹介をしてい
ただくというようなことがあって、なかなかそちらも充実しており、よく考えられていたなというふう
に思っている。あと全体の印象としては、今回は合唱ということで、合唱のレベルもかなり高いと思
った。障害者の方も一緒にステージに上られて、一緒にみんなで盛り上がるということが特に印象に残
った。みんなでステージ、そして会場も一緒になって、障害者の方も一緒になって文化芸術を楽しむ
と、みんなで盛り上がるという点が特に今回印象に残ったところである。最後に、これからの課題
かなというのが、お客さんが満席だが、ちょっと年齢層が高いかなという感じがした。年齢層が
高い方が多かったと、これはこの後いろんな問題にも関わるかもしれないが、またやはり若い
人がお忙しいということもあるだろうが、若い方も一緒に楽しんでいただく。そして趣旨を
理解していただけるような形になると更にいいかなというような感想を持った。

【座長】

ただいまの報告からも、この3年間を見ても毎年新しい企画が実践されたことが確認できました。プロアマ合同演奏から始まり、障害者の方の主体的な参加、合唱、来年度はダンスがあるということで、力の入り具合が伝わってきます。発表の終わりに参加者の年齢層のお話がありましたが、音楽の領域でも進行していることに驚きます。その理由は忙しさだけでなく、若い世代の従来型文化に対する関心の低下ということかもしれない。継続的な課題です。

(2) 条例に基づく文化芸術推進基本計画の策定に係る現状分析と目指す姿の整理について

「資料2～2-2」により事務局から説明。その後、各委員から意見。

【事務局】(説明)

新計画の位置づけを御説明いたします。新計画は、昨年度制定された「千葉県文化芸術の振興に関する条例」により、県が策定することが義務付けられている文化芸術に関する施策の基本的な計画に該当します。これまで現行の「第2次ちば文化振興計画」に基づき行ってきた取組も大切にしつつ、条例に基づく新たな計画として策定します。また根拠法令としては、平成29年に改正された「文化芸術基本法」があります。こちらの法律で「地方文化芸術推進基本計画」の策定が努力義務として定められましたが、新計画はこの法律に定める計画にも該当します。

その他、直接の根拠となるものではありませんが、関係法令としては、まず「文化財保護法」があげられます。こちらの法律の中で、文化財をまちづくりに活かしていくことが今年4月の改正で記載されたところです。また、昨年6月に「障害者による文化芸術活動の推進に係る法律」が制定され、障害者の方の鑑賞・創造・発表の機会の確保や、文化・福祉・教育等の各分野の連携等が法律に盛り込まれました。さらに、平成24年の「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」では、文化施設の文化発信拠点としての機能の充実や、地域の特性に応じた施策の策定、劇場等の積極的な活用が定められております。

関係する計画は、まず千葉県の総合計画である「輝け！ちば元気プラン」です。こちらは県政全般に関する最上位の基本的かつ総合的計画であるため、新計画はこちらの計画とも整合性をとっていく必要があります。また、国の計画である「文化芸術推進基本計画」は、文化芸術基本法を受け国が策定した総合的かつ計画的な施策の推進計画ですので、こちらとも調整を図っていく必要があります。

計画期間は、令和3年度から令和7年度までの5年間を予定しています。現行の第2次文化振興計画が令和2年度までとなっていますので、切れ目のないような形となります。

次に現状分析ですが、各種アンケート等の結果について、資料 2-1 を御覧ください。このたび新計画策定にあたり、6 種類の調査を実施しました。それぞれの調査の概要を説明いたします。

まずは「文化芸術の振興に関するアンケート調査」ということで、無作為抽出した 18 歳以上の県民 3,000 人と県内文化芸術団体 60 団体に書面で調査を行いました。調査期間は 9 月 10 日～10 月 15 日ということで、台風 15 号の直後となり県民の皆様には大変御迷惑をおかけすることになってしまいましたが、調査を実施しまして、回収率は県民向けが 35.1%、団体向けが 68.3%となりました。

次に「インターネットアンケート調査」ですが、こちらは千葉県で行っている「県民参加メールマガジン」に登録していただいている県民の方に対して実施したものです。インターネットを使った調査で、調査期間は 8 月 30 日～9 月 12 日、回収率は低く 10.9%でした。

また、千葉県高等学校文化連盟に御協力いただき、「県内高等学校書面アンケート調査」として県内で文化的な活動に力を入れている各高等学校の 3 年生を対象に調査を実施しました。5 校合計で 1,212 人の生徒に御回答いただき、調査期間は 9 月 11 日～9 月 30 日でした。

4 つ目は「県内高等学校ヒアリング調査」、こちらの対象は授業において社会との関わりについて実践的な活動をしている千葉市立稲毛高等学校の 3 年生です。10 月 4 日に、普通科 1 クラス・国際教養科 1 クラスにおいて授業の一環として実施し、県庁職員が学校に赴き、担任の先生と一緒にヒアリングをさせていただきました。

5 つ目は「県内商工・観光団体アンケート調査」です。県内の商工会・商工会議所・観光協会に書面のアンケート調査を実施しました。調査期間は 9 月 27 日～10 月 15 日、回収率は 50%ということで、ちょうど半分の団体から回答をいただきました。

最後に「千葉・県民音楽祭出演者アンケート調査」ということで、千葉・県民音楽祭に出演した楽器演奏者・障害者団体・合唱団体の方 136 名に書面で音楽に関する質問を 1 問アンケートでお聞きしました。

次に、調査の結果について御説明します。

まず全般として、各種調査の結果全体を見たところ、子ども・若者の文化芸術にふれる機会の充実というところにニーズが高いということが伺えました。また、文化芸術に関わるきっかけとして、もともと好きだったケースが最も多いのですが、家族や学校、メディアの影響で関わることになったという回答が多かったのも特徴となっています。

各調査の結果ですが、資料 2-1 に掲載したものはそれぞれの調査の中で特筆すべきものを抜粋して記載しています。詳細については、参考資料として添付しました「文化芸術アンケート等各種調査の結果(速報)」を後程御確認いただければと思います。

まず18歳以上の県民に対して行った調査の結果ですが、文化芸術を鑑賞・体験しなかったと回答した方は約13%ということで、逆に言うと87%の方が何らかの鑑賞・体験をしたということになります。次に、回答者のうち約半数の方は自分が文化芸術活動することに興味があるのですが、そのうち半数が継続的に活動をしておらず、理由は「仕事・育児・介護等で忙しく時間がない」が最も多く、また「自分の都合のよい日時に実施されていない」、「活動に関する情報が得られない」という回答が多くありました。加えて、自分の地域に伝統芸能があるかどうか知らないという回答は3割強でした。また地域に伝統芸能があると知っている人のうち、「参加しているが続けたくない」、「参加していないし今後も参加したくない」との回答が合わせて6割強となりました。

次に文化芸術団体への調査結果ですが、回答があった中で、平均年齢は70代が最も多いという結果でした。約9割の団体が年1回以上の発表会や展示会を行っており、ほぼすべての団体会員以外の参加を受け付けております。また、9割以上の団体が障害者に参加してもらいたいと思っており、広く多様な人に参加してもらいたいと団体の方では考えていると思われます。活動上の課題として、は「新規加入者が少ない」を挙げている団体が8割を超え、最も多くなっております。さらに、自らの役割についての考えとしては、自らの団体の役割としても県へ求める役割としても、子どもたちへの文化芸術の普及が重要ということで、最も多く挙げられています。

次に高校生向けの調査結果ですが、関わっている文化芸術はないと回答した生徒は約5%であり、ほとんどの生徒が文化芸術に関わりを持っているようです。文化芸術への関わり方としては、鑑賞も実践も『音楽』が最も多いという結果になっています。また社会人になった後でも、約7割が文化芸術と関わりを持つことを希望しています。地域の伝統芸能活動について今後も続けたい、又は新たに参加したいという割合が合わせて約3割でした。ヒアリングの方では、『地元愛』を感じると回答した生徒が40%を超える結果となり、自分の住んでいる地域に愛着を感じる生徒がいるということが少しわかってきました。また、文化の違いを感じたり、外国の人や文化と触れ合うことをきっかけに初めて自分の文化を認識したりすることがある、といった意見もヒアリングの中で聞くことができました。一方、文化について情報がない、活動を知られていない、知らないので参加しにくい、活動の機会が少ないと感じるといった意見も寄せられました。

商工・観光団体へのアンケート結果ですが、商工・観光団体でも様々な文化芸術に関連した活動が行われており、例えば地域のお祭りへの参画や観光ツアーの実施など、文化芸術を活用した又は文化芸術団体と一緒に活動をする団体もいらっしゃるということがわかり、これらの団体も文化芸術を支えている団体であることがわかりました。また、文化芸術団体との連携の方法としては実行委員会での協力や後援、助成等があるのですが、一方、連携まで至っていないところも多いという結果でした。

最後に音楽祭出演者へのアンケートですが、音楽活動を継続していく上での課題をお聞きしたところ、活動時間の確保が難しいという回答が最も多かったです。

次に、資料2に戻り、先ほど御説明した関係法令やアンケート調査結果を踏まえ、目指す姿について説明させていただきます。

文化芸術を取り巻く状況としましては、文化芸術基本法をはじめとした関係法令の改正・制定等により、文化財の活用推進や障害者の文化芸術活動の促進など、様々な状況の変化が生じているところです。また、本県においても、平成30年10月に「千葉県文化芸術の振興に関する条例」が制定されたところです。文化芸術活動は、従来から、人に活力や心の豊かさを与えるものとしての意義がうたわれてきましたが、近年はさらに、あらゆる創造活動の源として、企業経営の考え方に取り入れられ、観光や産業への展開、地域活性化の効果も期待されています。経済の成熟により、交通網などの社会基盤の充実だけではなく、街が持つクリエイティビティや文化的な環境を豊かにすることが、街の価値を高め、持続的な成長をもたらすようになっていくと見込まれます。また、居住地近くで文化芸術の活動ができることや、これを楽しむための施設などの文化的インフラがあることは、地域の活力を充実させ、今後の高齢化社会の到来に際しても、住民の生活満足度の上昇に直結していくことが想定されます。また、千葉県はこの度の台風の被害も大きかったところですが、文化芸術は災害からの復興にも大きな役割が期待されます。平成7年に発生した阪神・淡路大震災では、震災後に兵庫県が作成した「阪神・淡路震災復興計画」において、基本目標の1つに「世界に開かれた、文化豊かな社会づくり」を位置づけ、文化芸術の復興と文化再生の拠点となるまちづくりの取組が、震災後10年にわたって進められました。さらに、東日本大震災からの復興でも、文化芸術が心の支えとなり、地域コミュニティ再生のきっかけとなったことが報告されています。千葉県においても、今年の台風により、住宅の被害のために大きな不安を抱えながら生活している方や、地域の文化財が被害を受けている事態が発生しているところです。文化芸術を通じて地域の行事に参加することや、被災した文化財の復旧により地域の象徴を取り戻すことは、地域のアイデンティティーを取り戻す契機となり、復興の原動力となるのではないかと考えております。このように文化芸術は、そのものの価値があるだけでなく、地域や地域住民の魅力や活力を高める力を内包していると思われれます。よって、文化芸術の振興により、県民が心豊かになるとともに、地域の魅力向上及び持続的な発展、居住地として選ばれる地域となることが期待できると考えております。

このような視点から本県を見た場合、特長と課題は次の点と考えられるということで資料3ページにまとめさせていただきました。千葉県の特長と考えている内容ですが、まず若者による活発で高いレベルの音楽活動が挙げられるかと思えます。先ほどの各種アンケート調査の結果からではありませんが、吹奏楽や合唱等の全国レベルでのコンクール入賞といった、高いレベルの活動が千葉県で続いていると

ころから考えられる特長です。また、先ほどのアンケート結果から、文化芸術団体や商工団体・観光団体などの多様な主体による文化芸術の実践がなされていることがわかります。

次に、千葉県は広大な県土を有していますが、それぞれの地域で特徴のある文化が根付き、地域の方々が文化を守り、継承する努力を続けていらっしゃいます。『ちば文化資産』に選定された「佐原の山車行事」「鬼来迎」「上総掘り」などは、国の重要無形民俗文化財にも指定されており、歴史的な生活文化や地域の特色を示すちばの文化と言えらると思われます。

最後に、増加傾向にある本県を訪れる外国人旅行者や在住する外国人、さらに東京 2020 大会のレガシーは、ちばの文化芸術を多様で豊かにするものとして期待できます。また、成田国際空港や、首都圏に隣接しているといった本県の立地条件により、文化の流入、交流が容易で、新たな文化を生み出しやすい土壌を有していると考えております。

一方、課題ですが、本県の人口は平成 26 年度以降は増加傾向にありますが、今後確実に訪れる少子高齢化の影響や、地域による人口の偏りなどによって、当該地域の文化の担い手不足や、伝統文化の保存継承などへの懸念があります。

また、今回の調査結果からは、文化芸術を行いたいと思っているのに、約半数の方が継続的な活動をしていない等、文化芸術を享受できる環境が十分とは言えない状況にあると言えます。

以上、特長と課題を提示させていただきました。また、昨年制定された条例においては、条例制定の目的として、「郷土への誇りと愛着を深め、先人が創りあげた文化の継承と新たな創造を決意し」、本条例を制定するとされています。

文化は、余暇、余興というだけではなく、生活全般の基盤となるものであると考えています。条例の目的に記載されたように、県民が、地域に誇りと愛着を持って、地域に根付いた文化を大切にしつつ、新たな観点で新たな「ちば文化」の担い手となっていくことが、地域を支え、将来にわたって、地域の活性化を図ることができるものと考えられます。

そのため、本県としては、文化芸術を取り巻く状況や条例の制定目的、本県の現状を踏まえ、本計画における「目指す姿」を、「あらゆる人々が文化芸術に親しみ、交流することで創り育む心豊かな県民生活と活力ある地域社会」としたいと考えております。

条例第 2 条において「基本理念」が定められておりますが、その基本理念を踏まえ、目指す姿に向けて、施策に取り組む際に次の 5 つの視点、「アイデンティティー」「多様性」「継承」「創造」「展開」を重視していきたいと考えています。

アイデンティティーは、千葉県民としての意識や、地域・郷土への愛着といった視点と考えています。多様性については、共生社会として、障害の有無や国籍等に関わらずに文化芸術に触れること。継承は、

伝統芸能・文化財などの保存や継承といった視点。創造は新たなちば文化を創っていくという視点。展開は、文化芸術がそのものだけでなく、多様な分野と連携、発展していく視点と考えています。

次に施策の柱ですが、今申し上げた5つの視点を持って、文化振興施策を次の5つの柱に整理し推進していきたいと考えています。

1つ目の柱(1)は、「あらゆる人々が文化芸術を享受できる環境づくり」ということで、文化芸術活動を行う人々の自主性や専門性が尊重されるとともに、障害の有無や年齢、国籍等に関わらず、誰もが文化芸術を実践・鑑賞することができる環境を整備するとしております。

(2)は、「ちばの多様な文化芸術が輝き続ける地域づくり」ということで、県内各地で守られてきた伝統文化や新たに育まれている芸術を活用した地域活性化などにより、未来にちば文化を継承する体制を整備するという柱にしております。

(3)は、「新たな文化芸術の価値を創造できる社会づくり」ということで、産業や観光・教育等、他分野との連携により文化が社会の様々な場面で輝く機会を創出する、としております。

(4)、(5)はアンケート調査等を受けて、1~3と若干形が違うものとして考えていますが、まず(4)は、アンケートの結果から、県民の皆様や文化芸術団体、高校生も、子どもや若者が文化芸術に触れる機会を確保することを求めていることが結果から伺えたから、このように整理しました。

(5)は、先ほど挙げた本県の特徴を生かし、県内で活発な若者の音楽活動や、多様で豊かな新たなちば文化が生まれ育まれやすい土壌など、ちばの強みを活かしたちば文化の創造を推進し、発信する、としています。

今後のスケジュールですが、まず今日の懇談会での骨子案についての御議論を受けて、3月の第3回懇談会で、今回お示しした計画の骨子に、県が実施する施策等を加えた計画概要案を作成し、皆様から御意見をいただきます。また、併せて文化団体や市町村へも意見照会を行いたいと考えています。

その後、4月から計画の本文案を事務局で作成し、7月頃に懇談会の皆様や、文化団体、市町村へ意見照会をしたいと考えております。次に、12月~1月頃にパブリックコメントを実施し、計画最終案を作成し、令和3年の3月に懇談会で最終案を御提示し、計画を策定、印刷、配付としたいと考えています。

最後に資料2-2ですが、今までお話しした内容を整理しておりますので、参考として御覧ください。新計画の骨子案は以上です。骨子案につきまして、御意見をくださるようお願いいたします。

【座長】

先ほどは今年の実績でしたが、議事の2では今後の話となります。当会議の目的を改めて確認すると、オリンピック・パラリンピックも含め、その後の文化振興のシステムをしっかりと構築していくための

ものとなります。オリンピック・パラリンピックもいよいよ近づいてきました。先生方からの具体的な御意見、よろしくお願いします。

【委員】

文化財の活用という視点でお話したい。佐原はおかげさまで文化的な資源がたくさんある地域なので、できるだけそういうものを大事に守りつつ、活用していきたいと考えている。最近特に文化財の活用ということで、前にも申し上げたが、重要伝統的建造物の古民家ホテルであったり、あるいは県の文化財をそのホテルのフロントに活用したりというような形で、具体的なハード物件での活用も少しずつ展開をされているところ。だが、やはり活用するにあたっては、文化財をきちんと守るという、そういうルールを踏まえた上で活用していかないと、今も結果として十分気を付けてはいるが、文化財を壊してしまうようなことがあると元も子もないということになってしまう。そのため、そのところは特に今後県全体の中でも、文化財の活用にあたっては、保存もきちんとするという前提における活用ということを考えていただけると大変ありがたいと思う。

それから、無形のいろんな文化がたくさんあって、それを子どもたちに伝承していくということだが、この結果を見てもなかなか地域にその文化があるということがわからないというような結果も出ているようなので、できるだけ小さい時からそういう機会を作っていくことが必要だと思う。佐原の山車行事は、国の重要無形民俗文化財でもあり、ユネスコの無形文化遺産にも登録をさせていただいていて、地域にとっては大変大事な宝物ということで向き合っているところであるが、子どものころから、地域の中で、お祭りの中で育まれるという中で、伝統や文化というものを自ずと身に着けていくというところがある。どこの地域にも小さなお祭り、いろいろあると思う。そういう指定とかされていないにしても、その地域の皆さんにとっては我が町の祭りは日本一だという風に思われているものが多々あるので、小さい時からそういうことに触れる機会を作っていただけると、地域の皆さんがそのように思ってもらえるようなサポートをしていただけると大変ありがたいと思う。

【座長】

有形無形を問わず、次世代につなげることの困難さを感じる報告でした。「伝統的文化」という切り口は、先に行けば行くほど、その時代の子どもたちにとっては価値認識が難しくなる傾向にあるのは事実です。先生からお話されたように、「自分のこととして考える」手だてが重要で、幼いうちからということも確かに1つの方法です。

【委員】

資料の 2-1 のアンケートの結果、まず「② インターネットアンケート調査」について言わせていただきたい。アンケート調査員 1,457 名からのアンケートだが、まず回収率が 10 パーセントという低さに、文化芸術に対する興味というのがこれくらいのものなのかということが、ちょっと愕然とした。

アンケート結果の中身を見て、今、速報値でこの資料をいただいているが、この 25 ページに回答者の構成割合が書いてあり、18 歳から 19 歳が 0 パーセント、20 歳から 29 歳が 0.6 パーセント。0.6 パーセントということは一人ということ。30 歳から 39 歳が 1.3 パーセント。全体の母数 1,457 名の年齢構成がわからないので、何とも言えないが、若い人たちの文化芸術に対するアンケートの興味のなさというのは、これは一体何なのだろうなとちょっとびっくりした。

一方で、資料 2-1 の《全般》のところに書いてあるように、文化芸術に関わるきっかけとして「もともと好きだった」ケースが最も多いということがある。そのもともと好きだったというのは、小さい時に文化芸術に触れたのだろうと思う。特に千葉県では、小学校、中学校、高校では吹奏楽だとか合唱にしても、非常に高いレベルでたくさんの方が参加しているので、そういったことなのかなと思うし、そのため私どもは文化芸術に触れる鑑賞の機会などもたくさんやろうとしている。小さい頃からのそういった教育機会というのは大事だなと、今先生もおっしゃいましたが、自分の感想としても、小さい頃から文化芸術に触れるということが大事なんだと思う。

それともう一つは、18 歳以上の県民のアンケートの総括のところにあるが、「文化芸術活動を行うことに興味があるけれども、継続して活動していない」というその理由の中で、「活動に関する情報が得られない」ということがあって、またこのアンケートの 21 ページのところに、県の方でホームページで「ちば文化交流ボックス」というのを作ってくれて、いろいろな情報を流していただいているが、やはりこれが知られていないのかなと思う。

例えば、今週末ちょっと時間が空いたから、この地域で何かやってないのかな、という時に、何か見られるようなものがあるといいのかなと思う。今だと、新聞などは結構週末いろんな情報を載せているが、そういうような形で窓口一つにして、例えば年末に何かやってないかなといった時に、それを見ると、地域でいろんなことやっているということが情報として得られるといいのかなと感じた。

いずれにしても身近にそういうものが、触れる機会がある、ということがわからないと触れられないのかなということが感じた。そういった意味では、資料 2 で今説明していただいた目指す姿は、これは大賛成で、文化芸術活動の持つ力というものを、今までの活力や心の豊かさだけじゃない他のものもあるんだよというのをしっかり県の方が伝えていただく、我々も伝えていかないといけないと思うが、こういったことをすることによって、地域が活性化することがこの千葉県を産業面でも観光面でも色んな

面で活性化することになるのかなと思うので、ぜひこういった広い視点をぜひ持って、やってほしいと思う。

その上で、資料2の3ページに目指す姿を次のとおりとしたい、と四角書きで、「あらゆる人々が文化芸術に親しみ、交流することで創り育む心豊かな県民生活と活力ある地域社会」とあり、この「あらゆる人々が」というのは確かにそうなのだが、あらゆる人々と言った時点で、包括的な視点となってしまう、自分のことを言われているかどうかわからないという、そのような感じで私自身思ってしまう。例えば「県民一人一人が」と言えば、自分のことなんだと、自分事のように感じられるような、そんな言い回しもあるのではないかと思う。

【座長】

アンケートの数値と回収率の部分は、私も気になっていた。特に「① 文化芸術の振興に関するアンケート調査」などに関しては、災害等も多くて回収できなかったということもあるかと思う。例年の回収率と比較してどうか。

【事務局】

「① 文化芸術の振興に関するアンケート調査」というのは、毎年やっているわけではないので、例年と比較はできないが、インターネットアンケート調査については、県の報道広報課の方で年に4回実施しているものである。報道広報課の方で希望のある担当課と調整してアンケートのテーマを調整するが、そこに今回、文化芸術関係を入れさせていただいた。こちらはメールで、アンケートの調査協力員になりますと登録していただいた方に、ボランティアをお願いしているようなアンケートであり、毎回大体10パーセントから13、4パーセントぐらいというような状況。このテーマだから特段低かったというものではないのかなと思っている。

【座長】

見る側が見ようと思わなければ結局伝わらないので、広報はますますいろいろなアイデアを使わなければならない。例えば文化芸術活動が小、中、高と千葉県は活発だなと実感するが、子どもたちが自分たちのこととして、見ようという気持ちをどうやって起こさせるのか。

【委員】

アンケートの取り方だとか、回収率が低いとかの問題は確かにあると思う。また、私も地域でお祭り

をやっているのに、ちょっと気になったのは18歳以上の県民の方のポツの3番目。伝統芸能を知らなかったという人が3割というのは、こういう方はたくさんいらっしゃると思うが、問題はここに「参加しているが続けたくない」とか、「参加していないし今後も参加したくない」という人が6割いらっしゃるというのは、これはどういうことなのだろうかと思う。要は、何かのハードルがあるのか、もしくは辛いということなのか。

また、今の結果は18歳以上の県民へのアンケートだが、下の高校生の方の結果を見ると、ポツの4番目に「郷土愛があるという生徒が40パーセントを超えています」と記載がある。一番上には、「7割が文化芸術と関わりを持つことを希望している」とある。これで考えられるのは、若い人はやりたいと思っていて文化芸術活動を始めるけど、18歳以上になったら、嫌になっていっちゃうということなのか。この辺はどういうことなのかというと、わかりやすくいうと、何か大人になったら時間の制限ができてしまうのかとか、いろんな理由ができて続けられなくなってしまうのか、はたまた人間関係が嫌になっていくとか、今あげたものだけではないと思うが、こういったことも実際にはあると思う。

その辺を先ほど、「あらゆる人々が文化芸術に親しみ、交流することで」と書いてあるのは、わかりやすく大変恰好良く書いてあるとは思いますが、どこかにいろんなハードルがあってできなくなってしまうということだと思う。そのため、ぜひここで県とかにお願いしたいのは、そんなに難しく考えないで、誰もがいろんな芸術を楽しめること。先ほど説明があったように、音楽もコンサートも絵画もたくさんあると思うが、やはり文化芸術はこういうものだ、と言うのではなく、誰もが参加できる仕組みを作っていくということが大事だと思う。

私も妻に連れられて東京に歌舞伎を見に行ったりするが、最初の頃はよくわからなかった。しかし最近は、本物を見るとやはりいいなと思うようになってきた。そういうものが千葉県には残念ながら比較的少ないと思う。ぜひDIC川村記念美術館のように大変立派なものがあるので、例えば県がもう少しフォローして、うまく誰でも見られるような仕組みにするとか、もしくは前からお話しているように、なかなか見られないものを県として呼んでくるとか、誰もが比較的ハードルが低い形で参加できるような仕組みを作っていたら大変いいなと思う。

私も子どもにお囃子を教えながら感じるのが、最初子どもの頃はすごく良く参加するが、だんだん忙しくなり、参加しなくなる。それはきっと何かもっと呼び付ける力がないといけないと思う。いずれにしてもそういうハードルは大人になっていくとだんだんできてくるので、それを行政的な面とか、もしくはこういう団体に、ちょっとでもハードルを下げたあげた仕組みを作ってくれたら嬉しいなと思う。ぜひよろしくお願いします。

【座長】

もともと関心もあり参加したコミュニティから「離れてしまう」というところが残念です。伝統芸能などは特に、時代が先に行くとも価値認識の差が大きくなることから逃れられませんが、いかに自分の事だと認識してもらうかが課題です。技術的なことを伝承するのと同時に、「人が人に伝える作業」自体がとても意味のあることだということを子どもたちに正確に伝えたいものです。

また、子どもたちがイメージする文化芸術というものと、私たちが残したいと願う文化芸術というものとの定義のズレもあるでしょう。そういったことを含めて先生方の意見も参考に、県の方からのフォローもいただきたいと思う。

【委員】

全体としての印象だが、去年条例が制定された後の状況と比べると、この骨子案は大分整理され、すっきりした感じになってきて、大分洗練されたなという印象である。作りとしても、目指す姿がまずあって、それをフォローするための視点がきちっと整理されていて、そこから施策の柱を打ち出してくる、この構成も非常にいい。基本通りにできているので、非常にわかりやすいという状況に大分なってきたな、というのが私の素直な印象。去年、条例が制定された直後の混乱した状況から比べると、大分わかりやすいしすっきりしてきたなど。中身的にもきちっと網羅されている感じがするので、この方針が具現化されれば、大変すばらしいことになるのかなというのが私の素直な印象である。

質問としては、このアンケートは、すごい労力をかけてやっているなと感じたが、この種のアンケート・意識調査というのは、当然継続的にやっているのだろうと思うが、このアンケート結果から、何か見出していくときのアプローチとして、当然ながら従来と比べてどうなのかということと、もう一つは他と比べてどうなのかということ。解析するための目の付け所として。その結果が、この特徴であり課題である、ということだと今伺っていたが、もし何か具体的な比較の結果があるのであれば、従来と比べてどんな傾向が出てきているとか、あるいは、他所と比べることにどこまで意義があるかよくわからないが、他の都道府県と比べてどんな特徴があるかとか、教えてほしい。

【事務局】

具体的な比較という点についてだが、今回実施している調査で、経年で毎年やっている調査というのは、ここの中にはほぼない。県で毎年調査しているのは、県民の方々を対象とした世論調査における「文化に触れた割合」という項目。

そちらと比べると今回は、文化に触れる割合が高く現れたと感じている。その要因は、まだこれから

もう少し分析していく必要があるとは思っているが、やはりオリパラに向けて、国でも県でも市町村でも、様々なところが文化の取組をされていらっしゃるということも少し効いているのかなと思うし、また設問において、いろんなことが「文化に触れている」ということに該当するということが、わかりやすくなるよう質問項目を工夫したので、回答しやすかったのかなというの也被えられる。

また、他の都道府県との比較をしていないので、具体的な比較はできないが、これから計画を策定していくに当たっては、計画の指標を作っていかなければいけないと考えているので、他県のものなども見ながら、どういうところを特に指標として設定していったらいいか検討していきたいと考えている。

【委員】

まず、今回高等学校に対してこのようなアンケートをしていただいたということについて、大変感謝している。県下には様々な学校があり、地域ごとに散らしてアンケートを取る形をお願いしたところがあったので、ここにある学校の指標については、概ね今の本県の高校生の現状を示していると思っている。

高等学校文化連盟の30周年記念式典の時に申し上げたが、条例ができたということが高校の文化芸術活動にとっては非常に大きな後押しになっていると考えている。今後どんな動きが出てくるかというのが非常に私も関心を持っているところである。特に伝統芸能については、やはり若手に頑張ってもらうないと、本当に寒い状況が出てくるのではないかと考えている。

高校生自体非常に忙しいという面があるし、それから自分が住んでいるところと、通っているところの学校では異なるいろいろな状況があって、なかなか地元の学校という意識を持ちがたいところもある。だからそういったこともある程度踏まえた形で、学校では、自分の住んでいる地域に対してどのようなことを考えていかないといけないか、例えば授業の科目や部活の場面で強調するよにということを経験を様々な形で申し上げてきた。

私が個人的に考えているのは、子どもたちが関心をもって、しかも持続的にやっていくには、様々な形で高校の場にどこかでバックアップしていただくことである。例えば経験している大人の方々に背中をポンと押していただけるように、もっと触れる機会を増やす場面を用意してもらいたい。また、アンケートでは、お金がかかるからこういったことをやりたくないという後ろ向きになっちゃった子も出ている。支援をしたいというところがあると、かなり若者が関心を持ってくるのではないかとと思う。

オリパラは、伝統的なものに対して目を開かせていくいい機会だと思うとともに、特に年配の方にとっては若者が様々な形で文化に取り組もうとしているということを経験してもらえらるチャンスだと私は思っているので、アンケート結果を様々な形で高校生の力を使えるような方向に使えればよいと思っ

いる。

もう一つ、インターネットを使つてのアンケートの取り方はちょっと難しい。もともと参加するかしないかというのを個として取り出した上でのインターネットアンケートだと思うので、もっと広くとれる機会を作ってみると、また違った成果が現れるのではないか。それから千葉県は地域性がかなりあるので、千葉から西の方、また東の方で大分異なったものをどういう風に一緒に合わせて県の姿とか方針を考えていくかというのは、また一苦労出てくると思うので、これはまた時間をかけていく必要がある。

【委員】

アンケートに付随することだが、アンケートで質問されたときに、伝統芸能のところでは参加というところに、祭りを見る場合には、見ることによって郷土愛を持つ。ここで、地元愛を感じている人が40%とある。本当はもっと多いのではないかと思うが、いろんな形で地元愛を、お祭りや音楽など、いろんな地元から発信されるものを見て郷土愛を感じる。

民俗文化とか文化財というのは、先ほどから言われているように、保護と活用、この保護の部分で問題なのが、いわゆる後継者、つまり演じ手が要るところ。音楽とか他のものだと、比較的自分の興味があるところに行って、実践するなどにはしやすいが、伝統芸能というのは組織があつて、結構いろいろ条件があるなど厳しい。自分が一人抜けちゃったら、後から今日休みたいと言っても続けられない。そういう結構大変なところがある。多分、アンケートのときに回答者は伝統芸能に「参加」って厳しいよねと感じると思う。でも見るのは好きだし、応援したいというそういうアンケート項目があれば、この部分はぜひぶん上がってくるのではないかなと思う。

私は普段神奈川県に住み、仕事をしているが、神奈川県では郷土芸能に関して、やはり担い手が少ないので、県立高校で特別学科を作って、いわゆる「三匹獅子舞」というお祭りだが、それを地元で後継者を育てるということを学校の講座でやっている。それは一応成功した。成功はしたが、実は問題が一つ出て、学校にはいろいろな県の生徒がいて、学校がある場所は愛川町というところだが、そこで芸能を勉強して、時にお祭りに参加する。だが卒業してしまうとそれぞれの地元に戻ってしまう。それで結局、後継者というのは、当初もくろんでいた地元の人ほとんどいない。そういうところをどうしようかというのは、今も課題になっている。

そのため、やはり子どもの頃からの参加してみても触れ合うというのは、どういう風にするのか。これは我々も自分たちでよく考えないといけないと思うが、そういったところを今回アンケートした時に、お金のことも少し出てきた。今回は全体的にはすごくよくできるなと思うが、細かく見ていくと答えづらい部分も結構あつて、うまく自分の意見がアンケートに投影されているのかということ、ちょっと怪し

いかなと思う。そのあたりを整理し直せば結果になると思う。

また、さっきインターネットというのが話に出てきたが、インターネットは私もやっているが、いろんな情報がものすごく入ってくる。膨大な量。するとその中で自分の答えに必要なものをチョイスするだけでも、結構いい作業になってしまう。比較的、自分からアンケートに協力しますよという人でもこの結果ということは、普通に舞い込む情報量がものすごい数になってしまっていると思うので、それをより一対一という風に、対面式に近いような形にする方法を皆さん方でも考えていただきたい。

【委員】

今伝統文化のお話があったが、佐原のお祭りはすごく面白い仕組みがあって、何かを守っていくというところで、前後3町の仕組みというのがある。佐原のお祭りの山車行事はお祭りだけじゃなく、年間通してのいろんな行事そのものが文化遺産になっているので、一回年間当番になっている形で行くと、そこで間違ってしまうと次の人も間違ってしまうことになるため、一つの町内がお祭りを9年間行う。前三年、中三年、後三年と言いまして、前三年は見習い。本番は中三年間を当番として働いて、後三年というのは次のメンバーを見守る。それでお祭りの9年で、前、中、後という形で傳承していくというものであり、その町内の子どもたちが、大人も含めてだが、そういうものがきちっとできるようにやっていくというのが、住んでいる人たちのお祭りに対しての姿勢になっている。

今高校での伝統芸能の後継ぎをというお話もあったが、小学校、中学校、高校も含めて、郷土芸能部があり、小学校の子どもたち、普通リコーダーを差して学校へ行くと思うが、佐原囃子を傳承するという部分があるため、佐原では横笛を差して小学校に行く。高校の皆さんも学校の中だけで文化活動をされているだけでなく、披露する場の提供というのが求められているので、ここ何年かは街中に出てきていただいて、高校生の皆さんにいろんな活動をしていただくということを街中でやっている。高校がいくつかあるが、いろんな部活動を街中の市民の人たちの近くで披露していただくというような取組を、ここ何年か行っている。

その一つに「さわらぼ」、佐原ラボラトリーという高校生が中心になって、大学生、中学生が集まって、自分の町のことを、文化を学ぶような場づくりを行っているので、地域全体で少し場を作っていくというようなことをやっていくと、普段から先が見えると言うか、伝統芸能に取り組んでいる小学校一年生の子どもたちも、中学校になったら、高校になったら、大人になったらみたいな絵が描けるような状況かなと思って見ている。何か少しでもそういう場を作るお手伝いと言うか、そういうことを、県、市、地域全体でやっていけたらいいなと思う。

【座長】

9年間という期間の重みを感じる。技術面も疎かにすることなく、人と人とのつながりの大切さも正確に伝える形が完成しているように感じます。

【委員】

またアンケートに関してのことだが、私どもはアマチュアの音楽活動、県内の音楽活動を振興するということを目的にして活動している団体。

よく千葉県は、音楽が非常に盛んだと言われている。しかし吹奏楽にしても合唱にしても、非常にレベルの高い団体がたくさんあるが、よく見ると県内でも実は地域によってずいぶん差がある。千葉県と言っても、地域によってずいぶん差がある。いわゆる吹奏楽にしてもマーチングにしても、これは全部トップレベルの団体がいくつかあるが、ほとんどがいわゆる西部。東葛、あるいは北西部というところが、そういうところが非常にレベルが高くて、活動が非常に盛ん。合唱やオーケストラにしても、どれをとっても、非常に盛ん。しかしよく見ると、かなり地域によってはまだまだというところがたくさんある。それを我々の団体の1つの課題としていて、県内どこに行ってもみんなが音楽を享受できる、どなたも活動できるという条件をできるだけ整えるお手伝いをしたいなということで、活動している。

コンサートも県内各地、年間1回だが、同じところでやらないで、各地を回ると、そこでまさにいろんな活動をやっているが、これを文化という目に当てはめて、千葉県にも文化の格差というのがやっぱりあるんじゃないかなと思う。このアンケートでは、それがちょっと見えないかなと思うので、文化の濃淡についてどういう風に捉えているのか、どうやって捉えていくべきか、ということをお聞きしたい。

【事務局】

文化の濃淡が千葉県内にもあるのではないかなという点についてだが、おっしゃるとおり、千葉県は大変県土が広くあり、また文化的な背景も南の方とか中の方とか北の方とかでかなり違うので、地域によりある程度文化の色もかなり違っているのかなと考えている。今回のアンケートについては、まだあくまでも速報ということで、地域別のクロス集計などが出来ていない状況なので、そのクロス集計などの方も見ながら、地域差や地域の特徴なども拾い上げていけるとよいのではないかなと思っている。

ただ、地域別で割ってしまうと、大分回答者の数字が少なくなってしまうところもあるので、統計的にどこまでできるかというところもある。今回、アンケート結果についてはまだ速報というところがあり、少し不十分な状況で皆さんにお示しすることになってしまい、申し訳ない。

また、地域それぞれの特徴というところだが、各地域における文化施策も調査してきているので、そういった事業の中から見えてくる部分も確認しながらやっていきたいと思っている。また、それを計画の中に反映させていければと考えている。

【委員】

この先、この骨子案をベースに具体策を織り込んでいくということになると思うが、インセンティブを与えないと、若者は多分反応しないと思う。インターネットという環境に一番なじんでいるはずの年代が、インターネット調査でなんの反応も示さない。無関心、要は得にならないというのか、たぶんそういうことなんじゃないかなという気がする。損得勘定に関してはものすごく敏感で、ドライというか、そういう世代だと思う。

自分の子どもたちを見ていても思うが、以前、私は東京の都心のオフィス、タワーマンションの一角に住んでいたが、そのマンションは若者を安い家賃で入れる取組を行っている。若者を優遇して、都心のマンションにこんな家賃で入れるんですか、というような家賃で入れる。なぜそういった取組をするのかと聞いたら、地域行事に参加させるためとのこと。要はバーター。家賃を安くしてあげるから、例えば神田明神の祭りに参加して、というやり方。

こんなこととしていいのかなとも少し思ったが、一つの例としてそういうインセンティブを考えていかないと、現実的には少子高齢化が進んでいく中で、担い手、若者の参加率というものは多分危ういのではないかという気がする。むやみやたらにやると批判も出ると思うので、その辺は専門家にお任せするとして、法令の許される範囲内で、なにか有効なインセンティブを考えて、やっていく。確かこの会議の中で、他の部署とも連携してやりますというお話が確かあったと思うが、減税ポイントが貯まるとか、そういったことでもやらないと、なかなか笛吹けど踊らずということなのかなという気がする。

【座長】

先ほど、文化に対する向き合い方に地域差があるという意見がありましたが、それは決められたジャンルに対しての指向の度合いで、むしろ当然かもしれない。更なる工夫をしながら広範囲に普及を進めながらも、逆に言えばそれこそ地域の特徴とも言える内容として、新たな文化の立ち上げにつなげる契機にしたいものです。「文化」の意味の許容範囲とすべきはそれほど広い。

また「地元愛」という感覚については、人口流入の多い千葉県地域の住民にはどのように響くのであろうか。例えば地域に元々ある文化のコミュニティに、教えてもらうことを目的に新住民が入っていくことはなかなか難しいことでもある。もちろん、それが可能な環境の確保や拡張もしていかななくてはな

りません。しかし自分たちの文化と思える新たな核を作り出すことも必要で、自分自身にとってのコミュニティが確保できたときに、初めて元々あった「文化」の価値についても理解できるのではないかと考えます。

例えば資料2の4ページの「施策の柱」ですが、(1)については、国際空港もあることで、海外の人からは身近な場所として捉えられているはずだと感じます。「観光」としてはまず見ていただき、居住意思につながればなお素晴らしい。先日、新潟駅の日本酒売り場で、日本のことが大好きで移り住んだという外国人スタッフの対応を受けた。日本・千葉の魅力をどのように見せていくのか。

また、(3)の文化芸術活動については、私は今年の夏「ちばアート祭2019」に関わらせていただいたが、「続ける」ということの重要性を実感した。先ほどのスタンプラリーの話もそうだが、少しでも長く続けてほしい。例えば尾道などであれば、大林監督の映画、尾道3部作などもあり、それぞれが聖地となっていた。千葉には観光スポットが実に沢山あるので、県が映画祭を企画して、受賞作品についてのテレビ放映など、いっそうさらなる発信も有効かと思える。新たな自分たちの居場所を模索する人もいるだろう。

また、もっと多くの駅で、駅構内コンサートのような催しを行ってはどうか。レベルの高い内容であれば聴いていても満足感が得られ、臨場感の高い肌感覚で文化を感じられる場所となるだろう。コンサート会場にはなかなか行けない人にも音楽との接点となり、意識向上にも繋がる。文化の維持保存と普及展開といった観点での取組がいっそう必要だと感じます。

(3) その他

大熊委員から現職退任についての御連絡、御挨拶をいただいた。

【大熊委員】

この12月末で館長の任期満了ということで、退任することになり、この懇談会のメンバーも退任になるので一言御挨拶したい。

3年間、この懇談会の末席に座らせてもらい、もとは化学メーカーの社員で文化芸術とは縁のない生活を40年近くしてきたが、この懇談会に入れさせていただいて、個人的にすごく勉強になったなど、こういう世界があったんだなということを強く感じた。

再三皆さんが言われているとおり、千葉県は今、非常に傷んでいまして、私どもの美術館も入館者数が激減している。文化芸術のマインドは完全に冷え切っているなど感じる。それどころじゃないという

状態。そのタイミングでオリパラを迎えるという、連動したこういう振興活動を展開していくというこ
とで、非常に難しい局面でやられることになると思う。継続されることに当然意義があるというか、力
になる。引き続き活動に余念のないようにお願いしたい。